

## 札幌・東京会場

## 考古学からみたアイヌの生活

8月1日（金）15：10～16：40 札幌

8月20日（水）15：10～16：40 東京

## 講 師

平取町教育委員会文化財課埋蔵文化財係長

沙流川歴史館学芸員 森岡 健治



私は10年程前まで、北海道埋蔵文化財センターで道内各地の遺跡を発掘調査していました。現在は、平取町の沙流川歴史館に勤務しております。そこで、今日は沙流川流域の発掘調査事例のうち、擦文時代あたりから時代を追って

〈資料1〉

アイヌの生活について話をします。

自分自身の経験から、学校で習う歴史は考古学の面から見ると多少戸惑うところがあると思うので、共通の時代認識に立つという意味から、まず歴史年表を見ていただきま

| 歴 史 年 表 |       |         |     |         |                                                                   |                                                                                           |              |       |   |
|---------|-------|---------|-----|---------|-------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------|--------------|-------|---|
| 環 境 変 遷 |       | 日 本     |     | 北 海 道   | で き ご と                                                           | 平取町の遺跡                                                                                    | 北 東 ア ジ ア    |       |   |
| 1100    | 平安海進期 | 平 安 時 代 | 古 代 | 擦 文 時 代 |                                                                   | カンカン2遺跡                                                                                   | 女真文化・パクロフカ文化 | 契丹(遼) | 金 |
| 1200    | 寒 冷 期 |         |     |         |                                                                   |                                                                                           |              |       |   |
| 1300    |       |         |     |         |                                                                   |                                                                                           |              |       |   |
| 1400    |       | 鎌倉時代    | 中 世 | アイヌ文化期  | 1356/諏訪大明神絵詞成る<br>(蝦夷に日の本・唐子・渡党の三種現る)                             |                                                                                           |              |       |   |
| 1500    | 小温暖期  | 室町時代    |     |         | 1456～1457/コシヤマインの戦い                                               |                                                                                           |              |       |   |
| 1600    |       | 安土桃山時代  |     |         | 1551/蠣崎季広、蝦夷と講話<br>1593/蠣崎季広、秀吉から朱印状を受ける<br>1604/松前慶広、家康から黒印状を受ける | 亜別遺跡<br>ピバウシ遺跡<br>額平川2遺跡<br>イルエカシ遺跡<br>二風谷遺跡<br>アベツチャシ跡<br>ニオイチャシ跡<br>ユオイチャシ跡<br>ポロモイチャシ跡 |              |       |   |
| 1700    | 小氷期   | 江戸時代    | 近 世 |         | 1669/シャクシャインの戦い                                                   | 1667/樽前b火山灰降下<br>平取桜井遺跡<br>オバウシナイ1遺跡<br>ペナコリ1遺跡                                           |              |       |   |
| 1800    |       |         |     |         | 1789/クナシリ、メナシの戦い                                                  |                                                                                           |              |       |   |



するのです。地層的な調査は条件さえ整っていれば非常に明瞭で、時代の新旧関係がわかります。

ではさっそく擦文時代から話を進めます。擦文時代とは、縄文、続縄文時代以降の時代で、まだ堅穴住居で人が暮らしていた時代です。土器には縄目の模様はなく、形だけ見れば本州の土師器と大差はありません。この頃、本州では土師器と呼ばれるものを使っていますが、擦文土器はそれを真似た土器といわれ、木のヘラや刷毛で成形して作ります。文様は上半部にしかなく、下半部は成形しただけです。これは堅穴住居のかまどに下半部を差し込んで使用するた



擦文時代 (土器)

〈資料4〉

め、模様が必要ないからです。資料4の土器は、だいたい10世紀の中頃あるいは11世紀くらいに作られた擦文土器で、粘土ひもをこね、上積みし、野焼きをして作られています。本州だと窯焼きで高温の器が使われている時代ですが、擦文土器は粘土をこねて作った深鉢や高坏のようなものしかありません。



須恵器

〈資料5〉

次はカンカン2遺跡から出土した須恵器ですが、これは非常に大きな甕です(資料5)。胎土分析の結果、青森県五所川原の窯で焼かれことが分かっています。中に何か入っていたと思われますが、残念ながら何が入っていたのか分かりません。このような大きい甕が、平取町に限らず全道各地で出土しています。写真ではよく分かりませんが、「めあと」という跡がついていることから、窯で焼かれ、大量に作られたものであることがわかります。

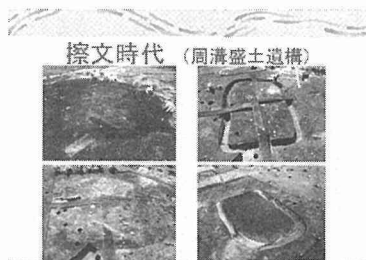


擦文時代 (堅穴住居)

〈資料6〉

擦文時代の一般的な堅穴住居は写真を見ても分かるように、方形の堅穴です(資料6左)。周りの土は白頭山-苦小牧火山灰で、粒子が非常に細かく、放っておくとすぐなくなってしまうのですが、堅穴をつくるときに土を掘り、その掘り上げた土を周りに盛ることで、この火山灰は飛ばされずにパックされていました。したがって、この堅穴は火山灰が降って、さほど時間が経過しないうちに造られたと考えられます。この写真は、掘り上げた土を除去して当時の面を出していますので、きれいに火山灰が残っているのが分かります。また、この頃の堅穴住居は、一般的には右の写真のよ

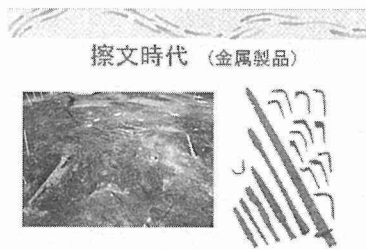
うな「かまど」をもちますが、カンカン2遺跡の堅穴住居にはありませんでした。中央に炉が一つあるだけで、平面形は四角い堅穴でした。右の写真は道北の美深町にある楠遺跡のものを参考にさせていただきました。カマドの入り口付近には袖石が立っており、壁の外に煙だしの煙突の役目をするトンネルのようなものを造ります。こういうスタイルが一般的な擦文時代の堅穴住居です。支柱は4本柱で、壁際には土砂が崩落しないように土留めの板をまわしていたのでしょう。



擦文時代 (周溝盛土遺構)

〈資料7〉

カンカン2遺跡に話を戻しますが、これは周溝盛土遺構という溝が巡る盛土遺構です(資料7)。溝を掘りながら、その掘り上げ土で30cm程度の土を真ん中に盛り、その最上面にいろいろなものを置いてありました。先ほどの堅穴住居と同じく白頭山-苦小牧火山灰がわずかですが残っていて、火山灰降灰直後に造られたことが分かります。これとよく似た形態のものに北海道式古墳というものが、江別市や恵庭市にあります。これは本州の古墳の影響を受けた末期古墳です。他の研究者からは、カンカン2遺跡の周溝盛土遺構も北海道式古墳と同様のものではないかと指摘する方もおりましたが、時期的な問題や古墳と断定しうる被葬者の痕跡が見られないことなどから、墓とは考えていません。盛土の最上面には刀、鉾、刀子などが置かれていました(資料8)。右上のものは、本州で見ればいわゆる船釘のよ

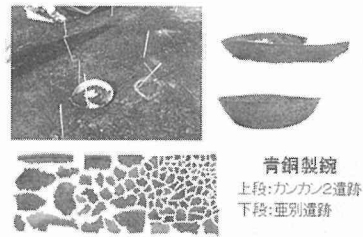


擦文時代 (金属製品)

〈資料8〉

うなものです。これを抜いて再生して、別の目的のために使用するための素材だと思います。この釘状の鉄製品は、ごく一部しか写っていませんが、36点出土しています。これと同様のものは、東北地方の遺跡でも平安時代の住居の床面からまとまった束となって出土したということです。おそらく何かを作るための素材として、まとめて置かれたものだったのでしょう。カンカン2遺跡でも鉄器のほとんどは、マウンドの真ん中に集中しているのですが、このL字形の釘状鉄製品だけは周辺に散らばっていることから意図的に置かれたものと思われます。この遺構の性格や目的は未だ断定できませんが、祭祀的なものという見方をしています。それから刀そのものの年代は、一般的に奈良時代刀と呼ばれているもので、奈良時代に製作されたものです。聖徳太子が腰に下げている刀は直刀ですが、これも直刀で切先は両刃になっています。では、この周溝盛土遺構は奈良時代に造られた遺構かというと、そうではなく、先ほどの火山灰から見ると明らかに10世紀中頃から11世紀なので、奈良

時代に製作された刀が伝世して、平取町に入ってきたということです。それから鉾や刀子類がありますが、いずれも抜身で鞘がありません。木質だから残っていないのだろうということも考えられますが、よく見ると刀も真っすぐではなく曲がっています。腕力で曲げたのではなく、屈曲点をもった曲がり方をしているので、熱を加えて意図的に曲げ、鞘に入れずに抜身でそこに置いたのだろうと推測できます。このようなものが、平取町の10～11世紀のひとつの遺構にまともってあったということです。それから青銅製の



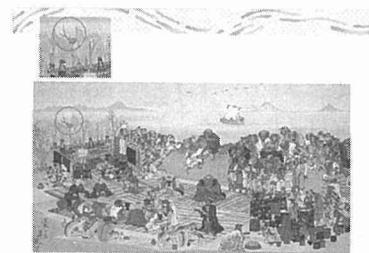
〈資料9〉

のお碗も同じ遺構から出土しています(資料9)。調査当時(平成6年)、これだけ良い状態で形が残っていたのは非常に珍しく、北海道ではカンカン2遺跡が初めての遺跡となりました。しかしながら、その1、2年後に恵庭市でこれよりきれいな形のもので発見されます。カンカン2遺跡のものは、形状が良く残っていたのは2個体、成分的には4個体の青銅製の碗がありました。左下の写真は小さな破片がはいっ



〈資料10〉

です。一般的に送りという話を聞くと、イヨマンテを連想する人が多いと思いますが、平取町の遺跡を調査していてもクマの骨はほとんど見つかりません。先ほどの歴史年表には省略して載せていないのですが、オホーツク文化期においては、クマの骨は遺跡や竪穴住居跡の中から出土したりします。ところが、擦文時代あるいはアイヌの遺跡を掘ってクマの骨が出土したという報告はごくわずかです。むしろ、この沙流川流域の調査をしていても、非常に多く発見されるのはシカの骨です。これが送りなのかどうか、非常に微妙な問題があるのですが、一般的に送りというクマ送りのイヨマンテを思い出しますし、シカはたくさんいたから送りをしなかったという話もあります。ところが、遺跡を掘っていると頭骨だけ、あるいはどこかのブロックだけ出土するということもあるので、ひょっとしたら、シカも古い時代には送られていたのではないかとも思っています。これはひとつの例ですが、道立の帯広美術館の特別展で使われた熊送りの図です(資料11)。小さくて分



熊送り図(国立スコットランド博物館)

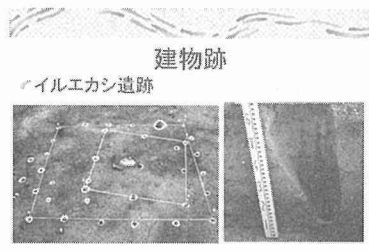
〈資料11〉

以外にも小さな柱穴がたくさんありました。ひょっとしたらヌサの跡だったかもしれません。上顎と頭骨、角は出てきますが下顎がない。ひょっとすると、このようにヌサにかけてあったものかもしれません。



〈資料12〉

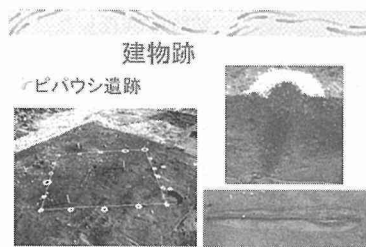
を模型にしたものがあります。このときの調査では、火山灰を取り除いた黒色の平坦部にわずかながら人が歩いた窪みに火山灰が残されていたことによって道跡が発見されました。模型の奥の方はユオイチャシ跡、手前はポロモイチャシ跡で、このチャシとチャシの間に建物が11棟ぐらいあります。ですからこの道はチャシとチャシの間、あるいはそれぞれの建物跡につながる道でもあり、このすぐ右下に当時の沙流川が流れていたと思われますが、そこへ降りる道跡もありました。



〈資料13〉

時間差があり、いくつかのグループに分けられるのですが、何世代かにわたってのコタンと思われます。また、建物群の背後にはチャシがあります。ひょっとするとチャシとコタンという関係がセットであったと言えるのではないかと思います。建物跡の平面形は、もうお気づきだと思いますが四角形です。セムとよばれる張り出しの前室がありません。二風谷アイヌ文化博物館前にも伝統的の家屋の「チセ」と呼ばれているものがありますが、それにはセムという前室があり、玄関が飛び出た形になっていますが、古い時代の建物跡はこういう四角形だったのではないかと思います。イルエカシ遺跡の調査では、これらの建物跡が倭人の家なのではないかともいわれましたが、この時代はセムのある

もの、ないものの両方があるようです。それからピパウシ遺跡は、沙流川とピパウシ沢の合流部にある遺跡ですが、ここは昭和10年くらいまで、フシココタンと呼ばれていた場所で、やはり建物跡が発見されました。こども真四角な



〈資料14〉

跡で、真ん中に炉があります（資料14）。炉は、土の層を観察するために半分だけ土層を切っていますが、よく火を焚いたところは土が赤くなっています（写真右下）。左側は灰をかき出した部分です。この建物跡の柱も打ち込み柱という、先が尖った非常に細い柱です。それから、さきほど二風谷遺跡には11棟の建物があると言いましたが、樽前b火山灰の降灰前の建物跡というのは、全部が四角形ではなく、一般的なセムがついたものと両方あります。どちらの建物跡が古いかなどははっきり分かりませんが、この沙流川流域



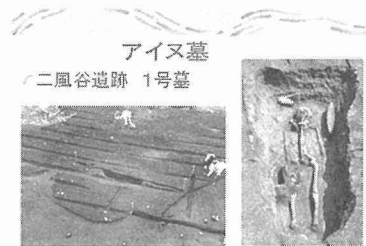
〈資料15〉

では火山灰が降る前に、セムをもった建物跡と、もたない建物跡と二種類あるということです。資料15は亜別遺跡の建物跡です。ここでは今までの調査とは違った観点から、柱の穴に非常にこだわった調査をしています。平面形だけを見ると、このような四角い建物跡です（左上）。この赤白のピンが立っているところに、柱の跡があります。大体一辺に直径10センチぐらいの柱が4、5本立っています。この柱の断面は左下の写真ですが、これもやはり先が尖っています。深さは自分の腕の長さくらいです。

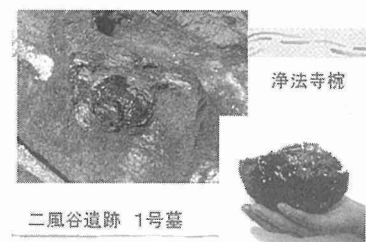
アイヌの家を造るときは、屋根からつくって柱で持ち上げるのが一般的ですが、この柱の傾きからみても、屋根の加重に耐えられるように、外ふんばりになっていて、その加重でピタッと刺さっていくように柱の先端がとがっていて、わざわざ穴を掘って柱を刺しているのです。柱が真すぐではなくて、若干かしがっていて、屋根の加重の力を借りて柱が支えられているという構造です。こういう建物が樽前b火山灰が降る前にあり、やはりここにも真ん中に大きな炉があります。それから右の写真はこの家の南側、8～10mくらい離れたところにあった掘立柱でつくった倉です。これは丸い穴の柱です。打ち込み柱よりもずっと立派な柱で、直径20センチぐらいあります。わざわざこの柱を直立して立てるために、一度掘って形を決め、そこに太い柱を6本建てた、いわゆる足高倉を作っています。これはおそらく住居とセットだと思えます。

次に樽前b火山灰降灰前のアイヌのお墓についてです。

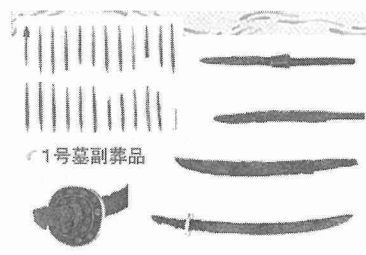
これは二風谷遺跡で見つかった墓の一例です（資料16）。この遺跡では、アイヌ墓がふたつ見つかっています。遺



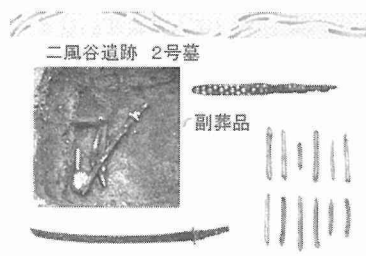
〈資料16〉



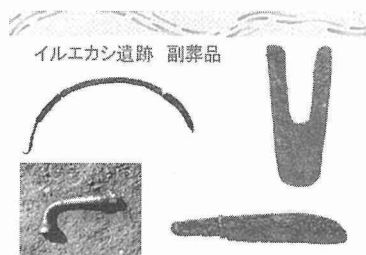
〈資料17〉



〈資料18〉



〈資料19〉



〈資料20〉

所だけ確認されています（資料20）。このアイヌ墓は掘り込み端から55cmほど離れたところで鉄鍋と鍬先が出土しています。鉄鍋は鋳物であるため、粉々になっていましたが、鍋のツルは比較的形が残っていました。そしてお墓の内部には煙管、小刀、鎌、鉈、漆器が副葬されていました。煙管があるということは当然タバコを吸っているわけです。

体を埋葬し、掘った土を再度埋め戻した結果、周溝に見えています。この縞縞になっている土の層は、耕作でもう既に削られたところですが、ここに遺体が入っていて、膝元には漆器があり、胸元には太刀がまっすぐ置かれています。

この漆器は、東北地方に浄法寺という町がありますが、このお碗ではないかと思われます（資料17）。二風谷アイヌ文化博物館には、萱野茂二風谷アイヌ資料館と一緒に国の重要文化財になった民具がありますが、その中にもこれと同じデザインのものが指定されております。

その他の副葬品（資料18）は、頭部付近から弓矢の中柄と刀子が、頭部左横に山刀が、墓標穴の横から槍が出土しています。遺体の上部に置かれた太刀の鍔（つば）は銀象嵌（ぎやうがむ）です。中柄は上段が全てクジラの骨で作られています。もうひとつのお墓は頭部の上位に少し空間があって、ここにまとめて太刀や山刀、刀子、中柄が副葬されています（資料19）。

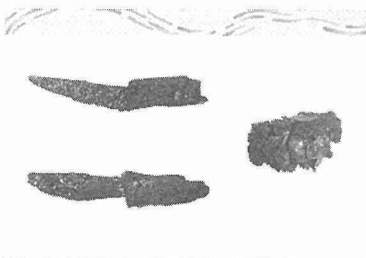
イルエカシ遺跡からもアイヌ墓が1カ

が、これは1492年にコロンブスがアメリカ大陸を発見して世界中にタバコ文化が広がり、日本にも入ってきたもので、1667年以前に二風谷のアイヌ社会にタバコが普及していたことを示しています。

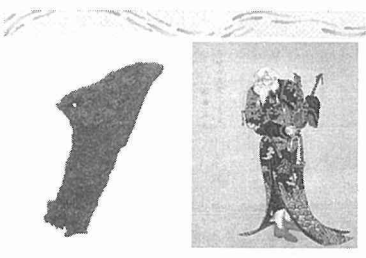


〈資料21〉

ですが、二風谷遺跡のアイヌ墓同様、ちょうど胸元の上に真っすぐ太刀が置かれています。それからかなり細かなものですが、ごちゃごちゃと鉄製の副葬品が入っています。ア



〈資料22〉



〈資料23〉

です。右の写真を皆さんは見たことがあると思いますが、夷酋列像の起殺麻(キサマ)という人がこの鍬形を持っています。はっきりしたことは言えませんが、先ほどの墓はアイヌのお墓だと思うのですが、入っていたものが刀や武器などという点からいうと、単純に兜の先端かもしれないし、もしくはこの絵と同じように、アイヌ語で「ペラウシトミカモイ」というのが入っているかもしれませんが、どちらかはなんとも言えません。ただ、このお墓は先ほどから何回も言っていますが樽前b火山灰、つまり1667年よりは古い墓なので、私がこれから話すものとは一致しないのですが、1700~1800年代のアイヌの伝承の中に、「霊験のあるものとして敬われ、病人の枕元において病魔を追ひ払うなど、祈祷具として用いられたものである。また、ご利益があったときは、もう深山の土中や洞窟の中に安置されたため、所有者以外は分からないものとなる。」というもののなんです。この「ペラウシトミカモイ」は栗山町で大正時代に発見され、東京の国立博物館に置かれていたり、つい数年前はそれが栗山町に何点

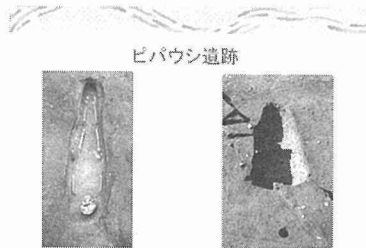
それから、二風谷の上流、ちょうど額平川と合流するところに額平川2遺跡があります。ここからアイヌ墓が出ています(資料21)。

遺骨の残存状況はあまり良くないので

プで見ると良く見えますが、これは小さな刀子で、10センチにも満たないものです(資料22)。この墓では刀子や小刀類など14点もの副葬品が検出されました。

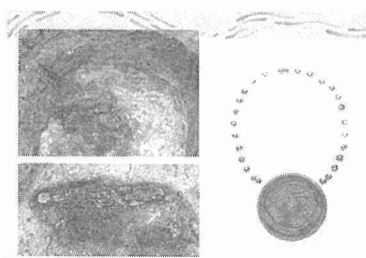
その他には小札(こざね)や布の付着した鎖状の鉄器やボタン状の銅製品なども出土しました。それから資料23の左側の写真は、一般的に鍬形と呼ばれるものですが、これも今のお墓から出土したもの

か戻ってきて、複製品を作成しています。したがって、この遺跡から出てきた鍬形が今と同じものだとすれば、発掘品の中では最古のものということになります。それから、



〈資料24〉

りと広い台形状で、頭部のほうが広く、足元のほうは狭くなっています。どうしてこんなに狭いのか。たまたま冬で、掘りにくくてそうなったのか、それともこういう埋葬方法なのかは分かりませんが、かなり窮屈そうに埋葬されている例と、今まで見てきたのと同じように、



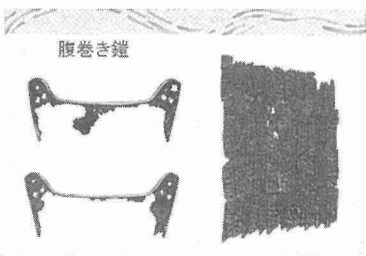
〈資料25〉

なった垂飾品で、その下からは刀子も1点出土しています。もうひとつのほうは(左下)、漆器と刀子が置かれています。

次にチャシの話をしてします。チャシ跡は平取町内で4カ所調査されていますが、これからお話しするアベツチャシ跡は、昭和36年に沙流川流域史調査団が学術調査を実施して



〈資料26〉



〈資料27〉

伝説があり、かつ義経神社があるものですから、こういうものを見ると「義経はやっぱり来たんだ」とか、「義経の身に着けていた鎧がそこにあったのではないか」というこ

ピバウシコタンがあったピバウシ遺跡でもアイヌ墓が調査されています(資料24)。ちょっと今まで見たものとは違って、窮屈そうに遺体をぎりぎりに埋葬しています。右側のほうはわ

る例と、今まで見てきたのと同じように、頭部の空間に副葬品を置いている例があります。資料25の右および左上の写真は、本州で一般的に使われている鏡と小さなガラス玉がセットと

います(資料26)。調査のきっかけは、地元の土地所有者がたまたま鎧を発見したことによります。このチャシ跡の形態は、丘先式や面崖式と違い、山の頂上付近に築造された丘頂式です。そこから資料27が出土したということです。これが沙流川流域史調査団が調査する前に、火山灰の下から発見されているわけですが、たまたま平取町というのは義経

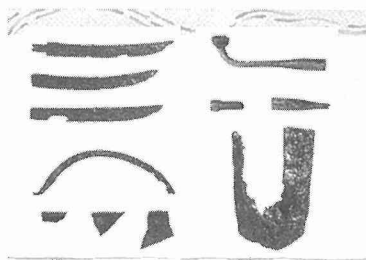
とになります。義経にロマンをはせる方は、どうしても義経伝説に結びつけたがるものなんですね。しかしながら、義経という人は、いわゆる騎馬戦で「一騎打ち」という戦法から集団戦法に変えた人であり、義経自身は大鎧を身につけて馬に乗っていた人です。しかし、この鎧は、「腹巻き」といって非常に軽量なものなのです。馬に乗れない下級武士が身に付けていた軽敏な鎧です。その腹巻き鎧を保存処理する機会を得ましたので実施してみたのですが、覆輪の鍔を落としますと鍔金が残っていました。おそらく、平取町に持ち込まれたときには鍔金が施されていて、もうちょっと立派に見えたと思います。また、これは写真で見ると、胸板がふたつあるように見えますが、実は覆輪の幅は17cm程度で、これは要するに脇の下に着ける「脇板」なのです。つまり、ふたつで一对。一人用の脇板と小札を編んだ草摺がまとまって発見されたということなのです。確かに、ものだけ見ると日本社会の中では、「鎧」で間違いないものです。ところが、先ほど言ったアベツチャシ跡というのは旧名「ピントメのチャシコツ」と呼ばれていて、伝承が残っています。以前にも紹介したことがあるのですが、要するに「ピントメという若者が、秘密倉庫に埋めてあった宝物を見つけ、やがてニシパになる。」という伝承なのですが、まさにその伝承と一致する場所からこういう腹巻き鎧ですとか、鉄鍋などが発見されたわけです。ですから、私自身はまずこれが鎧であることに間違いはないと思っていますが、アイヌ社会においては鎧という武器ではなくて、「転用可能な鉄素材の宝物」と考えています。このことは、あとでもう少し詳しくお話ししたいと思います。



ニオイチャシ跡

〈資料28〉

と同じものを、150年前に松浦武四郎が沙流日誌に描いておりまして、「チャシコツ」の名も記されております。ニオイチャシ跡の場所は右側の独立丘に見えるこの山、これがニオイチャシ跡です。ここの頂上部を沙流川流域史調査団が調査しておりまして、ユオイチャシ跡と同じように柵列跡が発見されたり、鉄鍋や鉄先、刀や刀子、煙管などが



〈資料29〉

次にニオイチャシ跡というのがあります（資料28）。これは沙流川第一の支流である額平川を遡った貫気別地区という集落のそばにあります。余談になりますが、この写真の景観と同じものを、150年前に松浦武四郎が沙流日誌に描いておりまして、「チャシコツ」の名も記されております。ニオイチャシ跡の場所は右側の独立丘に見えるこの山、これがニオイチャシ跡です。ここの頂上部を沙流川流域史調査団が調査しておりまして、ユオイチャシ跡と同じように柵列跡が発見されたり、鉄鍋や鉄先、刀や刀子、煙管などが出土しています（資料29）。実はこれも伝承が残されておりまして、「火矢を射込まれ燃えたところ、ウンチャシの神によって火を消し止めた」というような内容なのですが、それを証



ユオイチャシ跡

〈資料30〉

明するかのように火災跡も検出されています。次のユオイチャシ跡は、二風谷ダムを建設する際に発掘調査をしたチャシ跡です（資料30）。ユオイチャシのユオイとは「冷泉」、つまり冷たい泉が湧くところです。ここのチャシ跡は、ダム建設が原因でももちろん発掘しましたし、破壊もされましたけれども、実は発掘調査を実施する以前から既にほとんど土の層が破壊されていて、そこは畑になっていました。確か昭和44年だったと思いますけど、土地改良区による水田造成でチャシの主体部はほとんどが破壊されて、発掘調査時には段丘の縁だけが残っていました。壕も二重になった弧状壕であることは分かりましたが、結局、底部分を調査しただけに過ぎません。幸い段丘の縁は壕の残りがよかったため、ここの部分では壕の深さを確認することができました。壕に溜った火山灰は樽前b火山灰ですから、これを見ますと、この火山灰が降ってこなければ、こんなに埋まらなかったわけです。ということは、



柵列跡

〈資料31〉



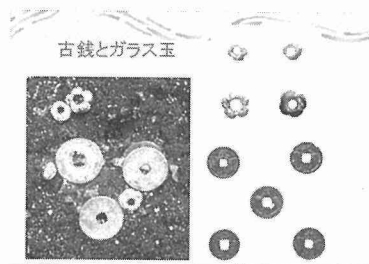
〈資料32〉

を刺して、横板を渡した柵をめぐらせたのだらうと思います。それを模型にすると、資料32のようになるわけなのですが、先ほどの模型を反対側から見ていただいたものです。それから先ほどもお話したとおり、ここは水田造成でかなり壊されていたため、主体部には何があったか分かりません。面積的には、2000㎡程ありかなり広いチャシです。ただ、何もなかったというわけではないと思われます。しかし残念なことに、二重の壕と、柵列の跡、そして若干の遺物を検出したに過ぎない状態でした。出土した遺物は、ガラス玉とか、古銭があります（資料33）。もちろん古銭はお金として使うのではなく、ガラス玉と組み合わせた垂飾品ですけれども、この古銭は永樂通宝が3点と洪武通宝が

明するかのように火災跡も検出されています。

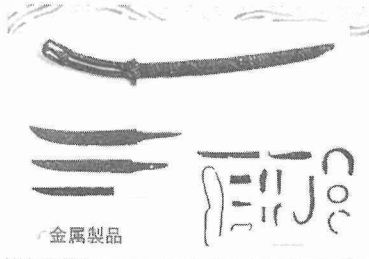
次のユオイチャシ跡は、二風谷ダムを建設する際に発掘調査をしたチャシ跡です（資料30）。ユオイチャシのユオイとは

降灰直前までチャシは使用されていたと思われます。資料31は同じ場所をちょっと上から撮影したものです。周辺に木の柵が写っていますが、これは発掘調査時に作業員さんの安全確保のために作られたもののようですが、ほとんどそれと同じように柵列の跡があります。白い火山灰が見えると思うのですが、やはりここも一方は壕によって、他方は崖縁の周辺に杭



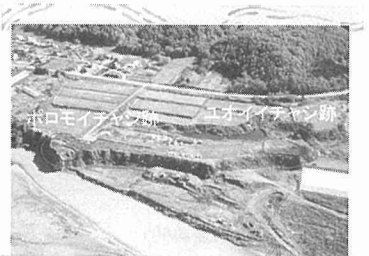
〈資料33〉

つくられた時代以降のものだと思います。基本的に5点のうち4点は古銭そのもので、真ん中の1点だけはわざわざ



〈資料34〉

干古地層だと思えますが、毛抜形太刀が出土しています。これは直刀から日本刀になる前段の刀です。ただ、この刀は本来もっと長いものです。たぶん、折れたものを作り直して、その3分の2くらいの長さで再生して切先を作っているようです。非常に刀の変遷としてはおもしろい資料です。先ほどの直刀は、刀身が非常に短くて70cm前後しかありませんでした。ただ、あれは切先が両刃のため、刀を振り回すものではなくて、突き刺すものです。この毛抜形太刀になりますと、持つところだけが反っていて、刀身はほとんど真っすぐです。これは刀を手にとると、刃先が自然に上を向くものですから、下から突き刺す形状をしている。その後、戦闘方法の変化に伴い刀も形状が変化していき、新刀と呼ばれる日本刀が作られていくことになります。ちょっと話がそれましたが、この毛抜形太刀は、昭和58年に発掘されたものですが、当時では北海道で5例くらいしか出土例のない刀でした。ユオイチャシの使用された時代、もしくはもうちょっと前の時代の人たちが、既にこういう刀を手に入れていたということになります。



〈資料35〉

この間はチャシも含めて台地全部が二風谷遺跡で、縄文時代からアイヌ文化期までのものが出土します。ポロモイチャシのポロモイというのは、ポロ＝大きな、モイ＝淵という意味です。このチャシのすぐ上流側、ここはこのように大きな淵となっていて、魚が休むのに非常に適した場所です。

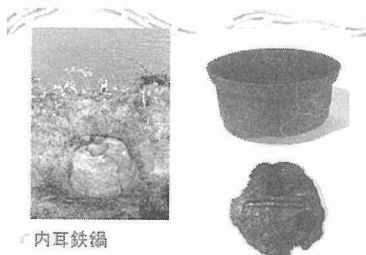
1点、皇宋通宝が1点です。铸造された年代が正しいとすれば、一番古いものは皇宋通宝の1039年が初鑄年ですし、洪武通宝が1368年、永楽通宝が1408年ですから、その永楽通宝が

そのポロモイチャシ跡の調査前地形は、先端に1カ所だけ突き出たチャシ跡だと思われていました。ところが、実際に発掘調査をしてみると壕がふたつ、別々にある。そこで、調査の段階では下流側の方をA郭、上流側の方をB郭とい

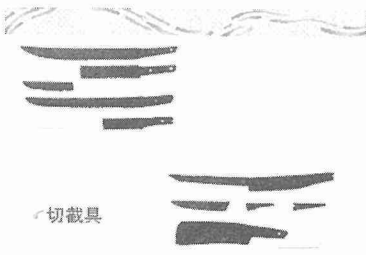


〈資料36〉

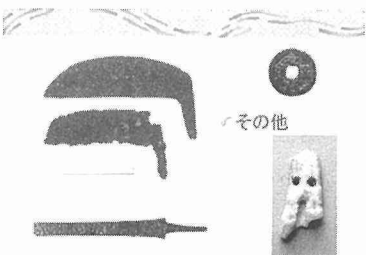
うふうに名付けて調査を進めていきました（資料36）。右下の写真はほぼ完掘したような形に見えますけれども、A郭内に焼失した建物跡が見つかりました。また、両方のチャシ内部からは、魚の骨が発見されております。サケ・マスの椎骨、それからイトウ、キュウリ、シシャモ、ウグイなどで、ほとんど現在のものと変わりません。シカの骨も発見されて



〈資料37〉



〈資料38〉



〈資料39〉



〈資料40〉

また、両方のチャシ内部からは、魚の骨が発見されております。サケ・マスの椎骨、それからイトウ、キュウリ、シシャモ、ウグイなどで、ほとんど現在のものと変わりません。シカの骨も発見されてます。それからB郭にも建物跡が1軒と、4本柱の足倉跡が発見されております。このA郭とB郭の時代差というのはそんなに変わらないのですが、若干、A郭の壕のほうがB郭の壕よりも先行して掘られていることが判明しています。チャシ内部からの遺物は、先ほど紹介した魚骨やシカの骨のほか、金属製品などがたくさん出土しておりまして、明らかに人が暮していたと思われます。A郭の川に面した先端部からは、鉄鍋が伏せた状態で発見されました（資料37）。伏せた状態というのは、おそらくこれは壊れて使われなくなったものを「もの送り」したと思います。形状は内耳鉄鍋で、一文字湯口です。比較的古いタイプのものです。また、チャシの内部、あるいは壕の内部からはこういう刀類や鉈などが出土してお

ります（資料38）。それから鎌も出てきます。のみも出てきます。消失した建物跡の炉の中からは、鹿角製の銚先も見つかっております（資料39）。それから壕の中からはこういう唐津焼の大皿も発見されました（資料40）。年代は、16世紀末から17世紀の初頭のものです。

したがって、ここのチャシの性格というのは、どうも砦とは違うような感じがします。しかしながら、壕より内側は土を若干盛ってしまって、杭の跡が確認されていることから、柵みたいなのが巡っていたのだらうと思います。このチャシ跡も先ほどのユオイチャシ跡と同じように、壕がほとんど火山灰によって埋まっていますので、1667年以降は掘り返されることはなかったようです（資料41）。

それではアイヌ文化期における樽前b火山灰降灰以前の道具を見ていきたいと思います。まずひとつ目は漁労具です（資料42）。ポロモイチャシ跡、二風谷遺跡からはヤス、それからマレク、あるいはアッという漁労具が出土しています。

次は狩猟具です（資料43）。先ほど紹介した二風谷遺跡の墓からの出土品ですが、クジラの骨製（上段）とシカの骨製の中柄です（下段）。鉄鏃が装着されたままのものも一例だけ出土しています。

切截具は擦文時代からずいぶん出土していますが、この時期にも太刀、山刀、刀、小刀、刀子、鉞などたくさん出土しています（資料44・45）。

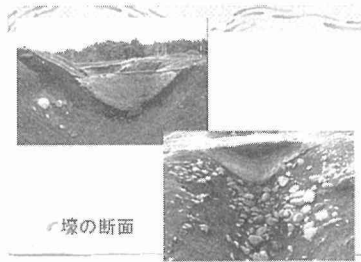
それからこれは斧ですけれども、左の斧は擦文時代の袋状鉄斧です。右側の斧はマサカリといわれるものです。こういうものも二風谷遺跡から出土しております（資料46）。

それからよくアイヌ民族は農耕をしなかったと言われておりましたが、他町では確実に畑の跡も確認されていますし、沙流川流域でもこのような農耕具が出土しています（資料47）。また、先ほど紹介したピパウシコタンのあったところとされるピパウシ遺跡では、栽培種のアワ、ヒエなども検出されています。ですから、生業とまではいなくても、時期的には農耕もしていたと思われるます。

鉄鍋は古いタイプの内耳式鉄鍋や、吊耳式のものの、足の付いた鉄鍋などが出土しています（資料48）。また、陶磁器類の出土量は少ないのですが、ポロモイチャシ跡やイルエカシ遺跡から絵唐津大皿や天目茶碗、播鉢などが見られます（資料49）。

それから煙管は先ほどお話しましたように、イルエカシ遺跡の墓とか、ユオイチャシ跡、ニオイチャシ跡などから出土しています（資料50）。

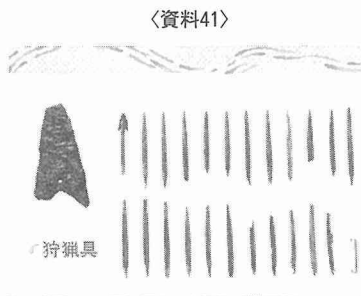
次に紹介する装身具のうち、資料51は非常に珍しいもので、コイル状に巻いているのが分かるでしょうか。これは二風谷遺跡から出土したものなのですが、これと同じものは常呂町のライトコロ川口遺跡や美々4遺跡からも出土し



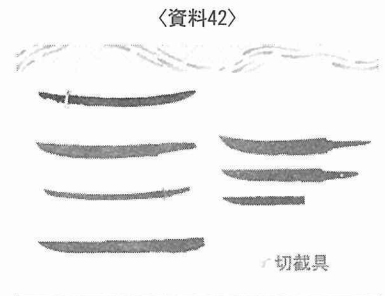
壕の断面



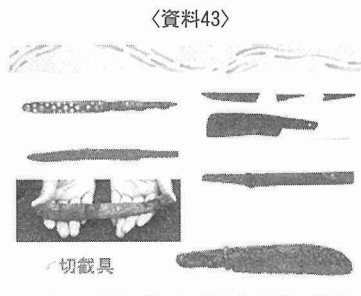
漁労具



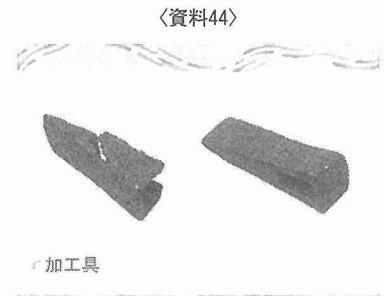
狩猟具



切截具



切截具



加工具



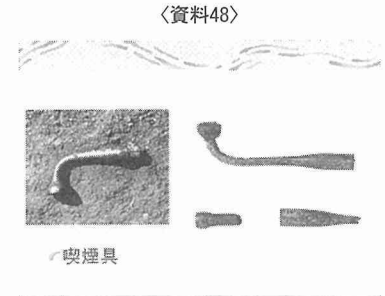
農耕具



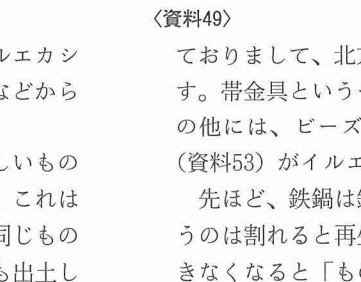
容器類(鉄鍋)



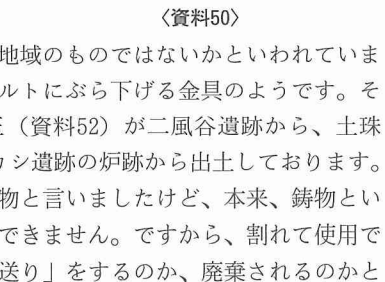
容器類(陶磁器)



喫煙具



〈資料49〉



〈資料50〉

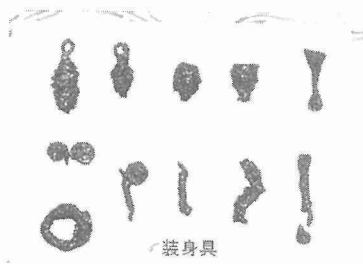
ておりまして、北方地域のものではないかといわれています。帯金具というベルトにぶら下げる金具のようです。その他には、ビーズ玉（資料52）が二風谷遺跡から、土珠（資料53）がイルエカシ遺跡の炉跡から出土しております。

先ほど、鉄鍋は鋳物と言いましたが、本来、鋳物というのは割れると再生できません。ですから、割れて使用できなくなると「もの送り」をするのか、廃棄されるのかと

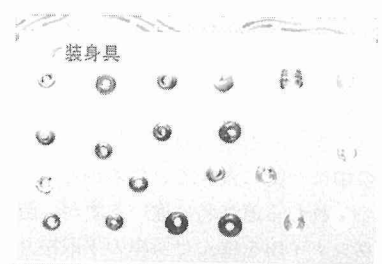
いうことを考えなくてはなりません。しかし、ものによっては資料54上段のようなものも出土します。実はこの鉄鍋片の両脇に付いているのは、先ほどお話しした小札（こざね）です。この小札というのは非常に薄い鉄板みたいなものです。ですから鉄鍋にひびが入ってちょっと使いにくくなったなどというときには、このように小札を溶接してひび割れを押さえていたのでしょう。また、下段の刀も刀身と茎が逆になっています。これもおそらく刀身が折れてしまったため、残存する刀身部分の刃を潰して茎とし、逆に茎部分に新たな刃をつけた再利用あるいは再加工品といえるものです。つまり、少々破損品は、小鍛冶で直せるものであれば、再利用、再加工しているのだと思います。

樽前b火山灰降灰以降、つまり1667年以降の話になります。以降といってもいつの時代か詳細な時期は分かりません。特にオパウシナイ1遺跡というところでは、アイヌ墓を5基調査しているのですが、そのうちの1基は水道管の埋設工事で壊されていました。つまり、その工事以前のお墓であるということをはっきりしています。また、遺跡の脇には大正二年に造られた用水路があり、その工事の際にはアイヌ墓があったことを誰も知らないため、どんなに新しくても大正二年以前のものと思われます。このお墓の被葬者は、年齢的にいいますと、16歳から18歳くらいの女性の方でした（資料55）。頭の方は、南東方向、つまり沙流川の方を向いています。他の4基のお墓もすべて同じ方向を向っていますが、南東という方向を意識しているのか、沙流川を意識しているのか、沙流川の流れを意識しているのか、或いは日の出の方向なのか分からないのですが、一つの集団の中では比較的統一した頭の方を向いているようです。この女性は肩の部分と脇の部分に漆の椀が2点副葬されていたほか、小さな釘もありました。この釘は、決して棺桶があったことを示す釘ではないです。小さな箱ものがあったと思いますが、それに付いていた釘ではないかと思えますけど、3点だけしか釘が見つかってないため、何ともいえない状態です。ふたつ目のお墓は、骨の残りが非常に悪かったり、壊されてたりして非常に分かりにくい状態でした（資料56）。ただ頭と骨盤が残っていたものですから、それで頭位や埋葬状態が分かりました。副葬品は漆製のお椀、煙管、マキリなどがあります。このうち、漆器は膜面だけしか残っていないのですが、高台に「山本」と書かれていて、その上からマキリのような刃物でシロシ（所有の印）を付けています。それから煙管と一緒に出ているこの金物は火打金といえます。火をつけるときに使う道具です。

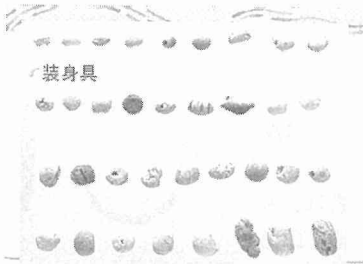
次は子供のお墓です（資料57）。年齢は分かりませんでしたがかなり幼児に近い子供だと思えます。2体一緒に合



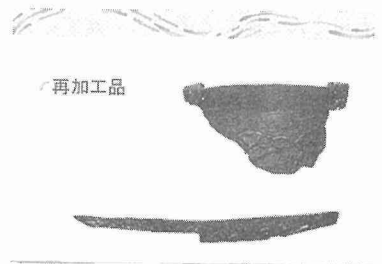
〈資料51〉



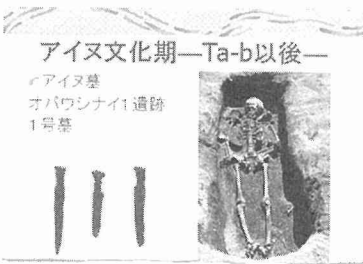
〈資料52〉



〈資料53〉



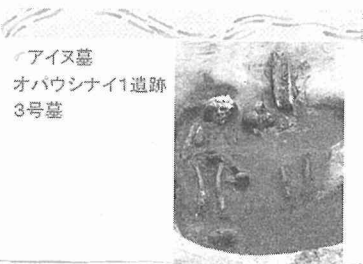
〈資料54〉



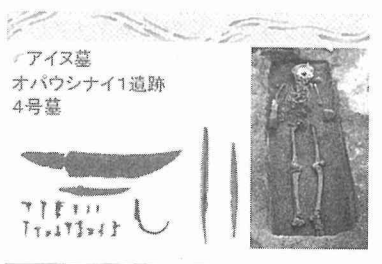
〈資料55〉



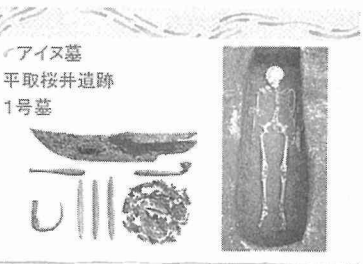
〈資料56〉



〈資料57〉



〈資料58〉



〈資料59〉



〈資料60〉

葬されています。おそらく2人同時に亡くなって、合葬墓となったのでしょう。お墓の上部や周辺は攪乱が著しかったのですが、副葬品は漆製のお椀が2点確認されただけです。

次のお墓の被葬者は、形質人類学を研究されている先生の同定結果では、年齢が12～13歳くらいの女性とのことです（資料58）。この被葬者は右脇腹辺りに比較的まとまっ

て副葬品が置かれています。タシロ、マキリが置かれて、その下に中柄が2本とマレクがありました。それからここにも木質の残った釘が発見されています。玉手箱のような小さな箱があって、その中に一緒に入っていたのかもしれません。

それから遺跡名は違いますが、脇を流れるオパウシナイ川を挟んだ対岸の平取桜井遺跡からも3体の墓が発見されました。頭位はオパウシナイ1遺跡のお墓と同じ方向を向いています。時代的にもほとんど同じと考えています。資料59は女性のお墓です。これは壮年女性としか分かっていないのですが、左脇腹にタシロとか、マキリ、あるいは中柄、マレクがあります。右肘のところには漆製のお椀が置かれています。

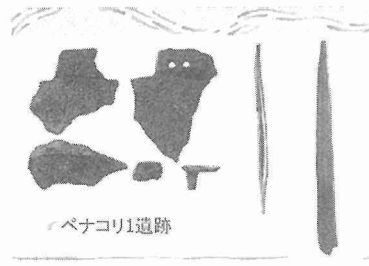
資料60のお墓も女性です。この被葬者は、資料59の被葬者より若干若い女性のようにです。頭部右側には大きな漆器がひとつ置かれており、また、膝の辺りにはマキリが置かれています。そのほか下腹部周辺には煙管や火打金、火打石などがまわってあります。この煙管をよく見ますと、雁首や吸口の下に細かく編まれた植物繊維がついています。つまり、これは「ライクルカロフ」というもので、死者に日常使用していた小物を入れて持たせる袋の一部が残っていたのだらうと思います。そしてその袋の中には、先に述べたものなどが入っていたのでしょう。それから鉄の針も検出されています。現在のものと比べて非常に長く、10cmくらいあります。この針もライクルカロフと一緒に入っていたものと思われます。

次はペナコリ1遺跡という遺跡です（資料61）。ここは明治31年の水害で水が付いたところなのですが、沙流川の氾濫だけではなく、支流が非常に暴れちゃって、ここに住んでいたコタンの人たちが今の国道のもっと上に移住したという伝承があります。わずか100㎡の調査だったのですが、鉄鍋、骨製中柄、木製のへらなどが出土しています（資料62）。また、陶磁器も18～19世紀代の伊万里焼などが検出されています。このことから、このコタンに住んでいた人たちは、日常生活の中で既に陶磁器を受け入れる時代になっていたということが分かります。

この火山灰降灰後のアイヌの人たちの生活具を見ますと、こういう漁労具としてはマレク（資料63）、狩猟具としての骨製中柄（資料64）があります。ただ、中柄の作り方をみると、二風谷遺跡など火山灰が降灰する以前のものと比べると、技術的にはずいぶん劣った感じがします。それから刃物類は次第に多くなってきます（資料65）。また煙管も火山灰降灰以前からありましたが、さらに嗜好品として増加しています（資料66）。たぶん金属製品が貴重な時代でありつつも、嗜好品を交易によって受け入れる豊かさやゆとりがあったのだらうと思われます。煙管には付きものの火打金、火打石、火口入れです（資料67）。装身具としてはガラス玉がわずか5点だけですが出土しています（資



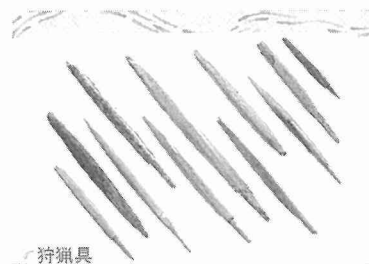
〈資料61〉



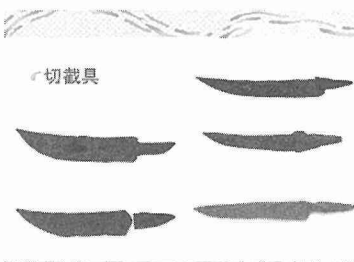
〈資料62〉



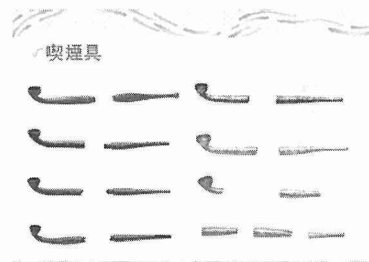
〈資料63〉



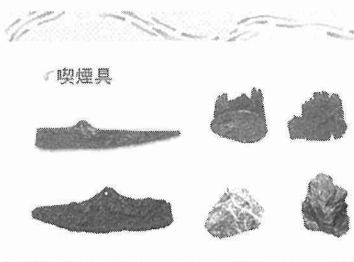
〈資料64〉



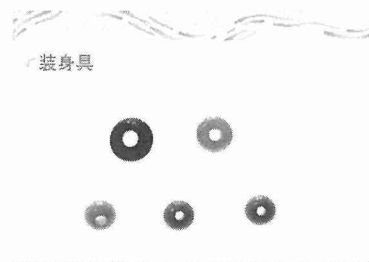
〈資料65〉



〈資料66〉



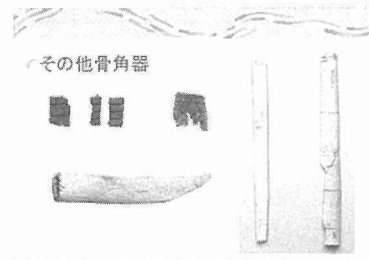
〈資料67〉



〈資料68〉

料68)。また、オパウシナイ1遺跡は、シカ製の骨角器やその未製品・加工品、破片などが約6万点出土しているのですが、骨製針や針入れの破片やマキリの柄と思われるものなども検出されています（資料69）。

長時間にわたり、火山灰降灰前の時代と降灰後のアイヌの遺構や生活具を見ていただきました。建物跡はいま私たちが伝統的家屋（チセ）で見えるものと比較して、古い時代のチセ



〈資料69〉

は柱が細く、屋根を支えるために傾斜した打ち込み柱となっていることが分かりました。新しい時代になっていくと張り出しを持ったセムと呼ばれるものが出現してくる。アイ

ヌ墓については、当然、時代により形態や副葬品が違う。被葬者が男性か女性によっても副葬されているものが違う。あるいは墓標の位置が違う。それから頭位はコタンによっておそろく違うと思いますが、今ご紹介した例では比較的沙流川を意識している頭位もあります。それと火山灰が降灰する前の時代は、刀が副葬される例がありますが、降灰後の時代ではたまたま女性のお墓ばかりだったからかもしれませんが、マキリなどはあるものの刀は副葬されない。それからチャシについては、火山灰降灰前は多く分布し、また使用されていたのが、降灰後は皆無。なぜか？災害と関係あったのか。特に機能的には、一般的にいう砦ではなくて、やはり聖地とか、祭りの場所、あるいは漁労に関する場所、見張り場所など、いろいろな要素が考えられます。チャシとコタンの関係からも考えなくてはならない。現在、私たちの自治会や区ごとに生活館があるように、ひょっとしたら集落の一つの単位にチャシがあったのかもしれない。しかも川に張り出して、上流、下流の見やすい場所であったり、山の頂上にあったりしますと、それぞれ性格が違うのではないのかということがあります。それから擦文時代までは、いわゆる土器の時代であり、アイヌの時代になっていくと基本的には鉄鍋の時代になるわけですが、その割には思ったより出土量が少ない。また、時間幅の広いアイヌの時代の中において、陶磁器というものは沙流川流域では他の地域と比較して、かなり後半になってから受け入れられているようです。農耕については道具でしかお見せしませんでしたけど、野生種ではなくて、栽培種のアワ、ヒエなんかも見つかっております。まだまだ話足りないことがあります、時間が過ぎてしまったので、このくらいで終わりたいと思います。

**質問** 大変な情報をありがとうございます。1667年の樽前山の火山灰層の厚さは平取で何センチぐらいか、聞いたかったですけれども。それから縄文時代の住居跡は円ですけれども、住居が四角くなったのはいつごろだと想像しているのかということと、それからイルエカシ遺跡の建物跡が二重の線を引かれたのはどうしてか。あとからまた遺跡ができたのかなと。

**森岡** 火山灰の厚さは、場所によって違います。その噴出元からどの方向に飛んでいったかによります。この樽前山火山灰は日高町方向に向かって降灰していますが、当然噴出元から遠く離れれば堆積は薄くなります。平取町の場合、現在の厚さで20～30cmくらいです。火山灰が降灰した直後というのは沙流川が泥流になったり、その周辺の植物は枯れたりと相当な被害だったと思います。ですからちょっと話がずれますけれども、シャクシャインの戦いはその2年後にあります、沙流川流域ではその当時、自然環境や経済動向も影響しているものと思います。

住居の平面的な形状は、擦文時代の堅穴住居がかまどを有する四角形です。アイヌの時代になると、

平地式の四角形になります。したがって、堅穴住居から平地の住居になるのが、概ね擦文時代からアイヌの時代と考えて良さそうです。ただし、縄文時代にも四角形の住居はあります。ただ擦文時代の住居は、本州の古墳時代の影響を受けて一斉にかまど付きの住居になっていきました。それからイルエカシ遺跡で白い線が二つ重なっていたのは、長い年月の間に世代が交代したため、一回廃屋になった家の上に再び建てて重なった結果です。ですから、数十年とか100年以上に渡って世代交代があり、その都度建て替えがあっただろうと予想されます。

**質問** 大変貴重なことをたくさん教えていただきまして、ありがとうございます。最初に歴史の年表みたいなものを見せていただきましたけれども、それは先生ご自身がお作りになったものかと思うのですが、何か出典といますか、参考になるような全体の流れの中で平取の遺跡は、この遺跡は大体この時代のものですよというふうなことがよく分かるものだったと思うのですが、我々がもう一度手にとって見られるような遺跡の報告書とか、こういう本を見れば、もう一度目にすることができますよというような本があればご紹介いただきたいと思います。

**森岡** オリジナルといえばオリジナルですけど、道内の埋蔵文化財の年表や沙流川歴史館のパンフレットの年表、それから北海道開拓記念館の図録と平取町内の遺跡報告書などをミックスして作ったものです。その他にはこちらのアイヌ文化振興・研究推進機構さんの方でも、早稲田大学の菊池徹夫先生がセミナーでお話した時に使用しているオリジナルの年表がありますし、『よみがえる北の中・近世』でもすばらしい年表を作成しています。それから文化庁にいらっしゃる佐々木利和先生なんかは、松前藩の記録にあらわれた「アイヌの大闘争時代」と称して1456年から1789年までの闘争に関わった年表を作成しています。このように、そのテーマに則したもので年表を見てみると、また違ったものが見えてくるかもしれません。